男女共同参画都市を目指して！

益城町は、平成21年11月、男女がともに自立し、尊重し合い、誰もが幸福に生きることができる社会づくりを目指して、男女共同参画都市宣言を行いました。

宣言文には

わたしたちは、豊かな水と美しい自然に恵まれ、熊本の陸と空の玄関都市としてめざましく発展を遂げた、このすばらしい住環境のもとに生活できることに感謝します。益城町民としての誇りを持ち、男女がいきいきと暮らせる男女共同参画社会の実現をめざします。

一　わたしたちは、男女が互いに人として尊重し合い、自分らしく生きることのできる益城町をめざします。

一　わたしたちは、男女が個性と能力を発揮し、あらゆる分野に対等に参画して活力ある町をつくります。

一　わたしたちは、家庭で、職場で協力し合い、やさしさあふれる地域社会をつくります。

と謳われています。

役場入り口に設置された看板

男女共同参画の先駆者

矢嶋楫子

益城町は、男女共同参画の先駆者矢嶋楫子（四賢婦人の一人）生誕の地（旧津森村杉堂）です。楫子は、惣庄屋矢嶋忠左衛門直明と母鶴子の2男7女の6女として生まれています。しかし、当時の極端な男性社会にあって、たびかさなる女児の誕生は歓迎されず、名付け親は10歳違いの姉である3女順子であったといわれています。

楫子の新しい人生は40歳、桜川小学校（東京）での教員生活から始まりました。その後、59歳で有名大学に多くの女性を輩出している「女子学院」の初代院長となり、女子教育に一生を捧げました。それと同時に、明治19年東京婦人矯風会（平和、性、人権、酒・たばこの害防止を目的とする日本最古の女性団体）を設立し、一夫一婦制の実現、廃娼運動、婦人参政権獲得運動など、女性解放運動家としても名を残しています。まさに女子教育・男女平等・男女共同参画の先駆者でした。

男女共同参画都市宣言は、人権尊重の町づくり

男女共同参画の目的の一つは、男女が互いに尊重し合い、協力し合う社会の実現です。仕事や家事、子育てなどを男女がともに分担し、また、地域の活動にも積極的に参加できるような、老若男女誰もが益城町に住んでよかったといえる社会の実現を目指しています。

益城町教育委員会

ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名 321

矢嶋姉妹の周辺⑥

三　徳富家

◇本家初代徳富又右衛門、元相良氏家臣相良義陽滅亡後浪人。のち加藤家・細川家に仕え寛永15年（1638）水俣に住す。

◇徳富淇水の祖父茂十郎は徳富分家の初代。寛政10年（1798）以来正院、津奈木御惣庄屋。二代太善次美信文化9年12月（1812）親跡御郡代直触。文政5年6月（1822）一領一匹。以来津奈木・葦北惣庄屋。

◇徳富太多七一敬、号は淇水、明治元年7月（1868）一領一匹。蘇峰・蘆花二人の父。

四　竹崎家（伊倉竹崎）

◇始祖竹崎道近、元加藤忠廣家臣。初代竹崎太郎兵衛宝暦9年12月（1759）御郡代直触。宝暦9年12月（1759）一領一匹。三代竹崎次郎八英貞は惣庄屋であった。

◇四代竹崎律次郎、文政13年6月（1830）地士。天保9年12月（1838）一領一匹。矢嶋順子の夫で号は茶堂。

◇五代新次郎万延元年8月（1860）父同様一領一匹。

❖徳富蘆花は「小川町海東の竹崎季長」の後裔がいつ頃かこの伊倉に流れて来たと言う。

五　林家

◇その祖とされたのは熊本県山鹿市の林家であり、一族の大部分は、その知行地は上益城郡沼山津郷中心に宛て行われた。600石から100石にわたり数家に分流した武士であり、その一人、林謙吾に矢嶋弥平次の妻（富永弥次右衛門の妹）の実家富永家七代目太郎助の弟七郎が養子に入った。七郎は西南戦争で小谷の農民一揆を抑えた。楫子の夫である。

◇益城町津森荒瀬の林家は250石の武士で、その屋敷は今もその風格のまま残っている。

益城町文化財を訪ねる会
会長　松野國策

今も残る林家の武家屋敷

※前回のサブタイトルは「矢嶋姉妹の周辺⑤」でした。